



■第20回読谷高校学園祭ポスター・テーマ決定!!



●ポスターデザイン選考について

今回のポスターデザインの応募は全員1年生でどの作品も力作ぞろいでした。美術の喜友名先生と協議し、青空の下で読高生がいきいきと活躍しているイメージがよく表現されている伊是名さんの作品に決定しました。

【担当：国語科城間友美】

1年3組伊是名愛華さんの作品

●学園祭テーマについて

「一生残せる軌跡を刻め」～あなたも一緒に青春いな祭～
(2年6組、3年7組合作)

■生徒の活躍

9月上旬沢山の生徒が活躍しました。おめでとう!!

●第47回沖縄県高等学校音楽コンテスト9/1,9/2

ピアノ独奏の部 銀賞 2年德里沙彩
木管楽器独奏の部 銀賞 2年喜友名朝輝
" 銅賞 2年知花瞬
(伴奏2年 宮城ことの)

独唱の部 金賞 1年幸地優花 (伴奏2年 當山鈴緒)

ヴォーカルアンサンブルの部 銀賞
1年 山内瑛理 比嘉花蓮 源河真歩
津堅門琉奈 知花愛 (伴奏1年 山内絳茉莉)

●平成30年度沖縄県高等学校新人体育大会 水泳競技

男子200M背泳ぎ 第2位 比嘉勇斗(九州大会派遣)

●平成30年度 第61回沖縄高校バスケットボール選手権大会 男女ベスト8!!

●第30回沖縄県高等学校席上揮毫大会9/3

優秀賞 1年 新垣 璃久
優良賞 2年 西依 百花、1年 西川あいり・町田 彩寧

●俳人協会第57回全国俳句大会「ジュニアの部」

優秀賞 3年竹上恵理紗
『月桃が戦のことを語り継ぐ』
佳作 3年与座昂人
『風鈴が祖母との時間長くする』

奨励賞 読谷高校(学校賞3校、奨励賞3校/全国79校中)

※全国小中高合わせて454校参加。2万6千余句から大会賞10句、優秀賞30句、佳作226句が選ばれています。

■沖縄地区数学教育協議会の研究大会に参加



沖縄地区数学教育協議会の研究大会が8月20・21日、うるま市立中原小学校でありました。仁愛大学の伊禮三之教授による「確率」の公開授業に2年生25人が参加した様子が沖縄タイムスに紹介されていました。新垣いなさんは「数学は苦手だけど、実験したので楽しかった」、宮城きりさんは「数学が生活に身近なものだと実感でき、もっと計算したくなった」と2人のコメントも紹介されていました。どの教科でもそうですが興味を持てば勉強は楽しいものです。楽しいと思うようになればしめたものです。頑張りましょう!!

題名：『花神』

著者：司馬遼太郎



今年(1868年)の明治維新から150年目となる。その明治維新、中心となり活躍した人材の多くは薩長土肥から輩出された。肥は肥前藩、佐賀県のこと。先月、全国高等学校PTA大会が開催された。大会の閉会式、大会副会長があいさつで「私は山口県出身で、妻は鹿児島県。私達夫婦は薩長連合です。」と言ったことで会場は大爆笑。山口県は長州藩で鹿児島県は薩摩藩、幕末に両藩は戦争をしてお互いが悪いのだ。そのことを副会長夫婦の仲に重ねたのと、「連合」で仲の良さが強調されたように思わせたことが笑いを誘った。薩長連合の成立は、土佐藩(高知県)の坂本竜馬の仲立ちによる。今でも多くのファンをもつ坂本竜馬を世に知らしめたのは小説『竜馬がゆく』の功績であろう。著者は司馬遼太郎、本名は福田定一で「司馬遷に遼(はるか)におよばざる日本の者(太郎)」が筆名の由来という。

司馬史観という言葉がある。司馬遼太郎の歴史観のことであるが、日本人の歴史観に大きな影響を与えている。収集する情報量は(ケタ違い)だと井上ひさしの著書『本の運命』にある。司馬遼太郎が古本屋に「こういう本はないか」と問い合わせると、古本屋街の店主たちはみんなで協力して段ボール箱に詰めて送り届けたそうで、(本が動いているという感じ)がした。また、本を読むスピードもくすごかった。(中略)あの方は「写真読み」です。文字を読むんじゃなくて、頭の中に写している」という。圧倒的な情報量と独自の歴史観で書かれる小説は、主人公たちが生き生きとして魅力的で読者を主人公たちに会いたく思わせるのだ。そうだからであろう、多くの作品が映像化された。以前流行った角川書店の「読んでから見るか、見てから読むか」というコピーを思い出すが、『坂の上の雲』は読んでから見た。『竜馬がゆく』、『国盗り物語』は見てから読んだ。『花神』もそうだったと思う。

その『花神』、主人公は幕末長州藩の蘭学者村田蔵六である。(蔵六は一種顔に力のこもったぶおとこで、眉が異常にふとく、目はぎょろりとして)おり、(それに無口で、とびきり不愛想)とある。故郷で村医者をしていたころ、村人から「お暑うございます」と、あいさつされると、「暑中はおついでがあたりまえです」とか、「そうです」とか、「暑中は、こんなものです」とこたえたという。(大革命というものは、まず最初に思想家があらわれて非業の死をとげる。(中略)ついで戦略家の時代に入る。(中略)三番目に登場するのが、技術者である。)その技術者である蔵六、討幕軍の大將となるのちの大村益次郎であるが、彼の登場がなければ明治維新は成功しなかったと言われている。